

第2回都道府県観光ボランティアガイド連絡協議会代表者会議 議事録(後半)

(笠井) 導入状況でございます。近年ですね、特にリピーターの中心とする外国人旅行者の増加ですとか、個人型。 はい。リピーターを中心とする外国人旅行者の増加ですとか、あとは個人型旅行と呼ばれている個人で旅行する方ですね。そういった方々が増加しているというところございまして、そういった方々が訪れた地域において、ご自身がその関心のある事柄ですとか、その地域特有の歴史とか、地理、文化について現地の情報に精通した方から詳しい案内を受けたいというニーズが高まっているという状況でございます。

こうした状況でございますので、これまで通訳案内士法とまた別に、特例法に基づきまして地方公共団体が独自に行う試験に合格、もしくは研修を受講していただければ、そのエリア、一定のエリアの中で有償でガイド行為を行うことを可能とするという、地域特例ガイドという制度を設けていたところでございます。現在、この26地域で約2,000の方が地域特例ガイドとして認定されておりまして、それぞれの地域でご活躍されているという状況でございます。

この地域特例ガイドというものは、今、あくまでも特例法でございましたが、特段の問題も見受けられませんので、この通訳案内士法改正いたしまして、特例法ではなくて、新たに地域通訳案内士制度として全国展開を図るということを今回導入したわけでございます。

この地域通訳案内士制度を導入するに当たりまして、国から、この地域通訳案内士が満たすべき、例えば外国語の能力ですとか、育成に関する基本指針をこれから示すこととなっております。

この地方公共団体におかれましては、この基本方針を基に研修の内容ですとか、育成の実施にかかる内容を記載した、この、ちょっと長いんですが、この地域通訳案内士育成等基本計画というものを定めることとしておりまして、この計画を基に各地方公共団体のほうで地域通訳案内士を認定していくということになります。

この育成等計画については、地域の実情ですとか、その地域のニーズに応じて、その地域の特性を生かした通訳案内士を導入することが可能になることとなります。

ただ、とはいっても、まだなかなか分かりづらい点もあると思いますので、その育成計画の策定の際には、われわれのほうからのアドバイスですとか、例えば優良事例の横展開等を行うことによって、質の高い通訳案内士が各地で確保されるように努めていきたいなというふうに考えております。

こちらは、その地域通訳案内士の認定の際に受講する研修のイメージになります。これ

はあくまでも、ちょっとイメージでございまして、今、先ほど説明いたしました地域特例ガイドで導入している研修の、大体平均的な研修の内容になります。

地域通訳案内士の資格とは、各地域によって地域の特性に応じて研修することで、研修を設けることによって付与されるということになります。現在導入している特例ガイドの中で求められる語学力のイメージとしては、例えば英語で言えば英検 2 級相当ですとか、TOEIC730 点以上と。また、その研修の時間についても、語学研修とか、コミュニケーション能力、地域の知識、旅程管理ですとか、そういった研修項目としておりまして、大体おおよそ全国的には大体 55 時間以上の研修時間。大体 2 週間程度というところで実施しているところが多いところがございます。

また、最後に研修を受講しただけではなくて、受講した研修の内容を効果測定を行って、ちゃんと身に付いているかどうかというところを判断いたしまして認定しているというところがございます。その履修状況が一定水準に満たなければ、補講するなりといった形で研修内容の理解を求めているというところがございます。

こういった形で各地のほうで、今後地域通訳案内士というものが導入されていくということになります。

以上が、地域通訳案内士制度に関する説明になりますが、次に若干ではちょっとございますが、うちの観光庁観光資源課で行っている業務のほうを簡単に説明したいと思います。

こちら、DMO を担う専門人材の育成というところがございます、観光庁では多様な関係者の参画の下で、いわゆるいろんな、各種データに基づく明確な戦略を、観光戦略を策定して、観光地域づくりに取り組む、いわゆる DMO という、もう形成を促進しているというところだと思んですが。国内のほうで、要するにこれまで DMO のような組織がなかなかなかったというところがございますので、地域の各関係者が取り組むような組織作りですとか、マーケティング戦略を策定するためのデータ分析・調整能力、経営的手法に基づく観光地運営とかですね、そういったもののノウハウが存在しないという状況でございます。

そのため、昨年度 28 年度から今年度、2 カ年で、国内や海外の先進的な事例を参考にしつつ、DMO 的手法で観光地の経営するための人材を育成するプログラムを策定すると。それによっては、その人材のマッチングもシステム化することによって、各地域での DMO の設立、運営の強化を図っていくというところを目指しております。

もう一つですね、こちらテーマ別観光による地方誘客事業というところがございます。観光庁では共通の観光資源を活用して地方誘客を図ることを目的として、複数地域のネットワーク形成と、その課題や成功事例を共有することによる効果的な観光振興について支援を行っているところがございます。

ここで、真ん中のほうにございますが、3 つの事例を示しております。まず、その酒蔵ツーリズムという。これは全国各地の酒蔵ですね、日本酒ですとか、焼酎とか。そういっ

た酒蔵を観光資源として活用し、外国人向けの酒蔵訪問時の受け入れ態勢支援を行っていくということで、そのネットワークの拡大を図っていかうというものです。

真ん中が、ロケーションツーリズム。こちら、例えばドラマですとか、映画等のロケ地ですね。ロケ地を観光資源として活用して、例えばロケ地マップを作成することで、その観光客の周遊を促していくといった取り組みになります。

もう一つが、エコツーリズム。こちらは専門ガイドを通じて、例えばその地域の自然ですとか、文化の重要性を観光客に浸透させることを促進している取り組みになります。このような取り組みを通じまして、特定のテーマに関心の高い旅行者にとってより魅力的な旅行を享受するとともに、旅行者の複数地域への来訪需要の創出ですとか、効果的な観光振興策を推進していかうというふうに考えております。

その中で、先ほどあった、この酒蔵ツーリズムですが、もうちょっと具体的に説明いたしますと、酒蔵ツーリズムというのは、日本産の種類、お酒ですね、日本酒、焼酎、泡盛、日本産のワインとかビール、こういったのを盛り立てるということで、それを観光資源として活用して、外国人観光客への訴求も見据えながら、わが国への、わが国ですとか、その地域の魅力の発進と、地域活性化につなげることを目的に、このツーリズムというのは発足しております、28年度においては100団体、70の酒蔵が参加しているというものでございます。

28年度のほうでは、モニターツアーを実施しまして、旅行商品化に向けた情報発信ですとか、そのプロモーション事業を行ってきたという状況でございます。今年度は国内外の富裕層の誘客や地域内の消費が図られる成功エリアというものをつくることを目標としておりまして、潜在力のある候補地を選定して、モニターツアーを実施するとともに、多言語化による、その情報発信により、インバウンド対応に取り組んでいかうというふうに考えているところでございます。

今申し上げました、このテーマ別観光というのは、これまで6件のテーマを設定していたところでございます。エコツーリズムですとか、街道観光、酒蔵、社寺、明治日本の産業革命遺産、ロケツーリズム。こういった6件のテーマを設定しておりましたが、今年度から新たに7件設定いたしまして、アニメツーリズム、古民家、サイクルツーリズム、全国ご当地マラソンというもの、あとは日本巡礼文化発祥の道、忍者ツーリズム、百年料亭というような、こういった新たなテーマを設定いたしまして、新たな観光需要を創出していきたいなというふうに考えているところでございます。

ちょっと簡単ではございましたが、以上が観光庁が行っている取り組み、支援の内容でございます。こういったことを通じまして、幅広く外国人に対して日本の魅力を発信していききたいなというふうに考えているところでございます。

以上で説明を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

(嶋田) それぞれ夢のある事例を含めてご発表いただきました。未来像ってうれしいですね。これからどんな観光が広げられるか、楽しみにしております。それぞれ、それを担

うのは私たちの仕事だろうと思いますけど。

はい。それでは、お待たせしました。平野さん、よろしく願いいたします。

ペーパーはお手元に、皆さんのお手元に行っていると思います。大分県別府の事例をご発表いただきます。

(平野) 皆さん、よろしくお願いいたします。大分県のふるさとガイド連絡協議会の会長を務めてます、平野と申します。

きょうは、こういう発表の機会を与えていただきまして、本当にありがとうございます。皆さんにちょっとでも参考になればなというところで、発表をさせていただきます。

(平野) それで、きょうのテーマはですね、皆さんお手元にありますように、観光地域づくりにおける観光ボランティアガイドと行政の関係についてということで、私がこれ、テーマを初めていただいたときにね、これは大変やなと、一応思ったんですよ。でも、それで、今回事例発表ということで、今まで私たちがやってきた内容を発表させていただきたいなというふうに思っております。

それで、お手元の、皆さん、私の自己紹介というところですね。いいですか。自己紹介というところを、ちょっと高見ていただきたいと思います。

(平野) いいです。それで、一番上に、ちょっとこうあるんですけど、実は私のプライベート資料館をつくっております。町ぐるみですね。町歩きのとときに、ここに立ち寄ってもらって、明治、大正、昭和のいろいろポスター、資料を展示した資料館をつくっております。

そして、今までこういう観光まちづくり、地域づくりということで、本当に純粋の観光ガイドだけじゃなくてですね、こういう観光案内をしながら地域づくりをしていこうということで、今まで平成13年度に全国地域づくり総務大臣賞、平成20年は地域づくり表彰「国土交通大臣賞」。去年はですね、全国地域再生大賞。今年の1月ですけど、これをいただいております。

そして、きょうはこういう観光ガイドと行政との関係ということなんで、一応私のほうも行政関係のいろいろな委員にも就任させていただいております。2019年にはワールドカップラグビーの大分大会というのが開催されますので、その推進委員、そして国民文化祭というのが来年開催されます。その実行委員会。あと、やまなみハイウェイとかですね、別府市のONSENアカデミアの委員とか、別府学の先生、小学校、中学校の教科書を作るとかですね、そういうのの編集委員も就任させて、行政と一緒にやっていこうということですね、取り組んでいるところでございます。

まず、大分県っていう知らない方もおられるかもしれないので、ちょっとだけPRさせていただきたいと思います。大分県っていうと、この別府温泉というのが有名です。今、シンフロとかいって、温泉の中でシンクロをやるコマーシャルですね。そういうのもものすごく今、あちこち出てます。

それとか、別府市では湯園地、湯園地の湯はお湯を書くほうですね。湯園地。温泉のジ

ェットコースターをつくったりとかということで、それがいよいよ今月の28、29、30日にオープンします。

そして、大分県というと湯布院が非常に有名です。外国観光客がどんどん来てます。今ですね。そういう湯布院があったり、非常にこういう歴史、文化も非常に多くて、国宝の宇佐神宮があったりとか、国東半島、海のほうでは佐伯のほうがあったりとかというような、歴史、自然、温泉が豊かなところが大分県でございます。

そして、大分県ふるさとガイド連絡協議会の概要ということで、今、大体県内に54団体、2,000人の会員の方が登録をしています。そして、それぞれ年に3回ぐらい担当者会議をやって、これには県、市町村、各観光協会の担当者の皆さん、参加していただくというような会になっています。

そこでは、いろいろホームページの更新をしたり、ガイドマップを作ったり、いろいろな連絡やったり、それぞれのふるさとの案内をしてもらったりというようなことをやっています。

こういう、それぞれの団体の交流ということも非常に大きいウエートを占めてますんで、いろんな地区に出向いて交流会を開催したりとか、そういうようなことをやっています。

そして、こういう別府、大分の場合は観光ガイドからさらに進化して、まちづくりガイドへ発展していこうということで、平成11年から、これスタートしまして、今年で19年目になります。こういう本当の意味でまちづくりガイドっていうような取り組みを、もう11年前から始めたというのは、恐らく大分県が最初だというふうに考えております。そして、これをずっと19年続けてきたら、町の住民意識がどのように変わってきたかというのを、ちょっと説明したいと思います。

住民の人が自発的な清掃活動をやってくれるらしいんです。人が歩くんでごみを拾う。で、住民、ガイドさん以外の住民が、その自分たちの店の前に来たら、自らガイドをしてくれるようになりました。で、まち歩きのエリアがだんだん、だんだん広がってきて、うちのほうも案内してくれるようになったということですね。非常に広がってきております。そして、地域住民が非常に生き生きしているというような感じになってきております。

行政・観光協会の支援ということで、非常にこういうまち歩きの立ち上げ時にいろいろまち歩き団体のはっぴとか、いろいろパンフレット、そういうのを作ってくれるというようなことで支援をいただいています。いろいろな取り組みに対してアドバイス等も、こうやってくれています。

そればっかしじゃなくてですね、課題、検討事項もいろいろ、こういうやっていると出てきています。例えば行政が考えてる支援策と、私たちまちづくり団体が要望してる、こういうことをしてほしいということなんですね。少しづれが出てきてる。本当はこういうことを、もっとしてほしいと、私なんかはですね。だけど、行政側は、そこはもうちょっとできませんというぐらいのことが出てきている。そして、おもてなしガイド、ガイドの人

材育成ということで、やっぱガイドを育てるとというのが、やっぱ官民協働で一緒にやっていると、なかなか難しい問題でございます。

そして、ハード事業とか、ソフト事業があるんですけど、このガイドのほうはどっちかっていうとソフト事業になります。実際歩く歩道を整備したり、外国語の案内標識を整備したりというのは、どうしても行政側にやってもらうということになっています。

そして、まだまだですね、観光ガイドとかいうと、割とボランティアガイドとかいうと、行政の方はぴんとくるんですけど、観光まちづくりガイドというと、なかなかぴんとこないところもあります。こういうのを多くの人にもっと認識していただくということです。

これは、まち歩き PR パンプの作成ということで、こういうようなマップを作っているところです。こういうのは地域のグルメと連携して、地域の商店街の活性化にも貢献しようということで、こういうマップを作ったり。これは英語でいろいろマップ、案内の温泉ガイドを作ったりというようなこともやっています。

そして、是非、今日、ちょっと紹介したいのが、こういう、今まで紙ベースでいろいろなことを宣伝してきたんですけど、紙だと、今のスマホとか、そういう時代になかなかそぐわない。印刷費用も結構かかるということで、なんとかこれを動画で配信できないかなということを考えました。

それで、地域にビデオボランティアですね、ビデオを作る団体がいるんです。ボランティア感覚ですね。そういう人と私たちガイド団体と、しかも行政が連携して、ビデオが今、どんどん出来てるんですよ。それをちょっとお見せしますね。

こういう感じですね。

(平野氏のビデオ) 正面に見えておりますのが、今から 374 年前に造られた櫓門と申します。きょうは、この櫓門を出発して、歴史と文学の道約 700 メートルをご案内いたします。武家屋敷の通りを、皆さんとご一緒に歩いていきたいと思っております。巴の紋ちゅうかね、よく言うじゃない、火を、火事よけ。こちらに見えますのが汲心亭です。江戸時代はこの辺り一体に藩の米蔵があった所です。平成 6 年に佐伯市がお茶室として、こちらを造りました。汲心亭という名前は、利休さんゆかりの京都の大徳寺の館長さんが付けてくれたお名前です。お茶をくんで、お客様の心をくんで、おもてなしをするという意味でございます。

この前に広がっていますのが、枯山水のお庭。白い石を敷き詰めておりますけど、真っ白な気持ちでお茶をいただくという意味があるそうです。今から約 200 年ほど前に、今泉元甫というお医者さまが、自分のお金を出して飲み水に困っている人々のために掘った井戸です。この井戸は明治 26 年、佐伯にやってきました国木田独歩の小説の中にも出てまいります。この前に見えております門がアキヤマ邸の門です。昭和 20 年 4 月 26 日の佐伯の空襲のとき、爆弾の破片がこの所に飛び散りまして。

(平野) こういうような感じですね、大体 1 カ所を 4 分から 5 分まとめて、YouTube

にアップしてるんですよ。先般ツーリズム大分、きょう来られているんですけどね、ちょうどトップページにこれをアップしてくれました。こういうので、参加する人がこれをちょっと、ちらっと見て参加してもらおうというような感じで、今も取り組んでいってます。今のところは6本アップしてます。これは各市町村に、まず1本ずつアップしていこうかなという取り組みをこうやっているところです。

今日はですね、こういう地域資源を生かした観光ガイドということで、幾つか事例を紹介していきたいと思います。そして、先ほど観光庁のほうからも発表がありましたけど、観光資源の保存・継承・活用のまち歩きということで、県内ではいろいろなところで歴史的散策、民話・文学の散策、偉人賢人歴史人物の紹介とかですね、そして、さらに一步突っ込んで、観光資源の保存・継承活動というのにも取り組んでいるところです。

2つ目は、文化・産業観光のまち歩きということで、やっぱ日本らしい文化を多くの人に伝えていこうということで、大分というと温泉ですよ。しかも生活文化ですね。特別な文化ではないんですけど、その住んでる町の暮らしぶりを伝えていくというようなのを体験できる生活文化散策。

そして、先ほど国宝、宇佐神宮があつたりですね、仏教文化も伝えていくと。そして、現代アートを散策できる。エコ・グリーンのニューツーリズムですね。こういうのを紹介するまち歩き。

外国語観光ガイドというのをやっております。

観光資源の保存・継承・活用のまち歩きということで、実際に19年いろいろなことをやっていると、いろいろな建物が老朽化で取り壊されたりとかいうことに出くわしています。それで、実際にこういう近くにある神社、波止場神社を声を掛けて修復、保存したり、竹瓦温泉という、別府で一番有名な温泉を、これを再建、鉄筋コンクリート建てにするという話が持ち上がったときには、行政と一体となってこれを保存するというような取り組みをやったり、こういう昔ながらの建物が中を、散策の途中に閲覧できていたのが、急に経営状態が悪くなって見られなくなった、これを何とかしようというような、こういう保存活動にも動き出しております。

先ほど言ったように、こういう生活文化を紹介していこうと。地域の人が急に、私たちが歩いていくと、町へ出てきて大分の方言を説明してくれたりですね。温泉の前では飲泉を体験できたりというようなですね。もう、地域では当たり前なんですけど、よそから非常に珍しい体験ができるようなことをやっております。

別府大分は観光地なんで、特に昼間のにぎわいも大切なんですけど、夜楽しいまちを創出しないと悪いということで、夜の活性化を図ろうということで、別府ならではの流しの文化を継承していこうということで、流しのはっちゃんぶんちゃんという人がいてですね、こちらが初代で、ここは2代、で、これ3代。で、今は3代目が活躍しています。こういう一つのこの文化を継承するというのも非常に大切なんですけど、大変です。こういう人探しからやるっていうんですね。

そして、こういう文化・産業観光のまち歩きということで、いろいろな温泉を元にした新しい竹製品の冷却装置ができたりですね、そして共同温泉を新しく経営、運営するのができたりと。そういうのをまち歩きの途中で私たちが新たに説明を加えていると。

これが外国語、今度は2019年にワールドカップラグビーが開催されます。大分大会があるんですね。これについてもいろいろ、今からたくさん外国人が来るだろうということ。

別府の場合は、地元有名な立命館アジア太平洋大学という留学生が2,000人いる大学があります。この留学生を生かさないとはいないということで、この留学生の人を別府のまちを知ってもらおうということでガイドを始めていますね。そうすると、これを長く続けていると、この別府のまち歩きが大学の授業にしてくれました。授業に。これに参加すると単位がもらえると。エキストラポイントがもらえるということになってですね。だから、学生が必死で参加してくれるんです。そして、こういう温泉の2階では、落語を途中休憩時間に聞いてもらったりします。日本語を勉強してるんで、少しは日本語分かるんです。そして、落語も、みんながここで笑ってほしいというときになかなか笑ってくれないんですね。ちょっと大きいジェスチャー、他の人が笑うと一緒につられて笑うとか、そういうようなところを見ても、何となく雰囲気が分かってきて。

今目指しているのは、そういう10カ国のネイティブの言葉で学生さんが直接外国人に対して案内してもらえるガイドをつくらうということで取り組んでおります。

そして、観光における地域活性化ということで、地域住民との連携協力というのも行政等と連携を組みながらこうやっていってるということです。そして、こういうまち歩きとか観光ガイドの途中に、こういうツールをたくさん作ってます。こういうスタンプラリーとかですね、まち歩きのスタンプラリーですね。こういうのに集めるといろいろ温泉道名人になれるとか、ガイド達人になれる、そういうような工夫をしながら多くの人に参加してくれています。

ちなみに、この88湯を回ると温泉道名人になれるということで、これは全国から登録者が8,000人の温泉道名人ができてます。で、その8,000人のまた有志がNPOをつくって、また別府を盛り上げていくみたいな状況が生まれてきております。

これからの観光ボランティアガイドと行政の協働の取り組みの事例として、今までいろいろ紹介してきたんですけど、やっぱり行政だけで、こういう観光ガイド団体でできないことがあるんですね。やっぱり一緒、両方を合わせて地域を良くしていくというスタンスがないと、なかなか良くなってきません。それで、地域観光を盛り上げて、地場産業を活性化させる。

それと、双方対等、ここ対等というところが重要で、行政から頼まれたからガイドをやるんやなくてですね、積極的に自分たちがガイドをやりたいからやるんだと、地域のためにやるんだと。だから、その立場は両方同じ立場なんだというところですね。で、コミュニケーションを取りながら、新しい観光客のニーズに対応していくということですね。

そして、地域づくりのために観光ボランティアガイドを行い、地域の課題を解決していくと。まち歩き、いいとこだけご紹介、これしていてもですね、なかなかそれ以上は良くならないんで、まち歩きしていると、必ずいいとこわるいところが見えてくると思いますね。その悪い所を何とかみんな力で合わせて解決していく。

最初に言いましたように、ガイド育成というのは、これはもう両方で力を合わせてやらないと、一石二鳥のできる問題ではありません。そして、地域特有の歴史・文化を生かした個性あふれる地域づくり推進に協働で取り組んで、本当に地域、田舎とかですね、地方であればあるほど、ローカルであればあるほど、本当の意味ではグローバルなんですよね。

先ほどからいろいろ話が出ているように、もう地域のそこに行かないと体験できないとか、そこに行かないと文化をいかに磨いてですね、ガイドさんが説明していく。そして、それが消えかかったら、それを保存していくというようなことを、地域づくりのため、観光ボランティアガイドが真剣になって今から取り組んでいく時期かなというふうに考えているところであります。

ということで、ちょっと多少飛ばした所もあるんですけど、あとは立派なレジュメも今回作っていただきましたので、これを見ていただければなというふうに思います。

以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

(嶋田) どうもありがとうございました。何か素晴らしいご発表で。いろいろな事例がヒントになるかと思います。協働という言葉、やっとな行政との間に根付いたんだなと思いました。働くという言葉が入ってるのがいいですよ。共に働くというのが。

さあ、それでは、今2つの観光庁の方の事例、これは事例というよりも夢も含めて、今後のアクションプランを発表していただき、そして平野さんから実際に取り組んでいらっしゃる、その様子を発表していただきました。これから小一時間ほど、1時間ないかな、皆さんのご意見を伺いたと思います。最初に、平野さん、あるいは観光庁の方へのご質問、これを先にいただきましょうか。それで、全体の皆さんのペースをそろえていきたいと思えます。

それでは、ご質問タイムということで。

(嶋田) はい、それでは、はい。いいですね、はい。後ろのほうは。

(嶋田) はい、3人。それでは、こちらから。

(矢野) 宮崎市から来ました、矢野と申します。これ、私の学習不足というかあれがね、DMOって書いて、何回でもおっしゃられましたけど、DMO的なとか、これをちょっと説明してもらおうと。これ、私だけが知らないかと思いますが、よろしくお願ひいたします。DMOを担う専門人材の育成について、どう思うか分からないんで、よろしくお願ひいたします。

(嶋田) はい。では、ご質問を全部3人伺ってから戻ります。はい、それでは徳島の方。

(田鍋) 徳島県の田鍋と申します。ビデオボランティアと連携してPR動画を作る、これ大変いいと思ってるんですけども。これ、ビデオボランティアさんというのも映像業者さんを雇ってるというか、費用面とかはどうしてるのかと。

こういう動画を作って、プレビュー数とか、その反応ってどうなのかを伺いできればと思います。

(嶋田) はい、どうもありがとうございます。続いては後ろの方、はい、どうぞ。最初都道府県と。

(野田) 熊本県から来てる、NPOディスカバリー熊本の代表の野田恭子です。私たちは英語でガイドする団体を立ち上げて、もう10年になります。そこで、この今日、お話のあった、地域通訳案内士制度について、お話のあった中での質問なんですけれども。

この地域通訳案内士資格不要のための研修イメージについてのところでいろいろお話ありましたけれども、例えばこういう研修は各県が組むんでしょうか。そして、またその場合講師等は中央から派遣されるんでしょうか。それとも地元の講師等を活用してやられるのか、もうちょっと具体的なお話が聞きたいと思いました。

(嶋田) はい。さすが野田さん。他に市町村の、県単位の県の方で。よろしいですか。せっかく観光庁の方おいでになってらっしゃいますけれども、ご質問は。よろしいですか。

それでは、3人の方から伺いました。それでは、先に観光庁さん、2点ご発言をお願いします。

(笠井) はい。宮崎の方から頂いた、そのDMOというものなんですけど、DMOって初めて聞く方も多いと思うんですが、Destination Management Marketing Organizationというものでございまして、簡単に言いますとデータ、いろんな観光データに基づいて、明確な観光に関する戦略を打ち出していくというような組織というのが今まではなかったと。国内ではなかなかなかったということで、僕が先ほどご紹介させていただいたような、そういう戦略を打ち出すような専門の人材を育成していこうということ、我々のほうで支援しているというところでございます。

(嶋田) これだけでお分かりになりますか。

(矢野) 分からない。

(嶋田) はい。もう少し、それでは。

(矢野) この略は何の略ですか。Dはデータですか。

(笠井) Destination。

(矢野) うん？

(笠井) Destination Management Organization というもの。

(嶋田) 実際にこれを担う人たちがどういうところからというような、その辺をかみ砕いておっしゃっていただいたらどうでしょうか。

(笠井) すいません、ちょっとまだこれ、昨年度から実施しているところでございます

ので。

(矢野) ああ、それじゃあ。

(嶋田) よろしいですか。はい。

(小林) 広島の小林です。広島県のほうでは中国5県がDMOをですね、昨年度立ち上げております。これは銀行等の出資で約10億円で設立をして、今、各、事務局は広島にあります。会長は以前は広島知事でした。立ち上げまで。現在はJR西日本の会長の佐々木さんがなっておられまして、いろいろ、これは地方創生ということですね。北海道のような7県が一つの観光地で世界に売り込もうという形で取り組んでおる、組織が。

ですから、例えば広島なら広島だけ、岡山は岡山だけではなしに、このせとうち地域を一体の観光地として世界的な、海外に売り込んでいかなければ日本も困るといいますかね、そういったような組織で。

(嶋田) 今、トップが分かりました。ここに入って、実際に入ってらっしゃるメンバー、行政だとか、そういうことを、もうちょっとご説明を。

(小林) 行政は交通、銀行、それから地方の市町村ですね。そういったところですね。

(久保田副理事) ちょっと補足で説明しましょうか。

(嶋田) はい、そうですね。よろしく願いいたします。

(久保田副理事) もともと日本の観光っていうのは行政、まあ、観光庁がありまして、国がありまして、地方行政に経済部の中に観光課があったり、いろいろな形であったわけですね。

さらに、観光協会というのが県にあって、市町村の中に観光協会というのがあって、それはどちらかというと旅館とかホテルの団体の皆さんが集まって、ある程度グループをつくって行政の、ちょっと極端に言いますとね、行政の政策の下請けのような形で、例えばパンフレットを製作をするとか、プロモーションを行うとか、旅館のおかみさんたちがキャラバンとして東京に集客へ行くとか、そういった組み合わせでやっていたわけです。

ただ、それですと、なかなか、何ていいますか、世界に対して発進ができないとか、海外からの方々に満足していただくような情報が提供できないのではないかとか、もろもろの課題もあって、諸外国の事例を国のほうでいろいろ勉強していただきました。そういう中で、ヨーロッパ型、アメリカ型っていういろいろあるんですが、細かいことは抜きにしてですね、先ほど笠井係長からもありましたように、Destination、これは目的地ということですね。Destination キャンペーンなんて言葉もありますけれども、どこどこへ旅行へ行く、そういった意味での目的地という意味、そして、Management、MはManagement。経営するということですね。Organization というのは組織ですけれども。その言葉に表せられているように、観光地を面として経営をしていくと。

ですから、企業の経営だけでは、旅館、ホテルの経営だけではなくて、旅館もホテルの方も、それから今、広島の方からも説明ありましたけれども、交通事業者とか、場合によっては飲食、農業、水産業、水産加工業、そういったあらゆる地域全体を網羅したような

形が参画をしていただいて、地域全体を観光地経営していこうと、そういう組織体をつくらうというのがDMOの目的です。

いろいろな形がありまして、今、広島の方からご説明あったのは、県単位ではなくて、もう少し、瀬戸内海全体に着目して情報を発信していったらいいんじゃないかといった趣旨で、せとうちのDMOができていますし、また、小さな単位でいいますと、市町村単位でできていたりするところもあります。自分の、例えば下呂なら下呂の温泉をしっかりとマネジメントしていこうと。先ほど笠井係長からありました、マネジメントの前提として、データに基づいたり、マーケティングをしっかりとやって、どのような方々が自分のところにきているのか、また、どのような方々がどのぐらいのお金を落としているとか、どのぐらいの期間滞在しているのか、世界中どこから来ているのかみたいな、そういうデータをきちっと押さえた上で戦略を立ててマネジメントしよう。その際、あらゆる団体なり、あらゆる産業から参画していただくと。そんな趣旨でできているもので、全国で130幾つでしたっけね、の観光庁に申請が上がってしまっていて、これがここ1~2年で動き出していくということですので、ぜひボランティアガイドの方々も関心を持って、またそういうところに参画していただくと大変ありがたいなと思っています。

ちょっと長くなりました。

(嶋田) はい。だいぶ様子が分かってまいりました。全国で130いくつっていうと、まだそれが網がかからないという言い方、ちょっと変ですけども、そういう地域もあるんでしょうか。

(久保田副理事) そうですね、ない所もありますですね。恐らく県単位であるのが幾つだったかな、10か20ぐらいですから、そうすると残りの40いくつの、30ぐらいの所は県単位で網がかかってないとなると、市町村のところではDMOをつくってなければならない。ただし、観光協会とか、観光機構とか、連盟とかっていうのはそれぞれのところにありますので、DMOという申請をしてなくても、戦略的にちゃんとマーケティングをして観光地経営をしていこうという組織であれば、名前がDMOであろうと、観光協会であろうと、まあ、観光に関わる戦略的組織ということには言えると思うんです。

(嶋田) ありがとうございます。矢野さん。

(矢野) はい。

(嶋田) よろしいですか。

(矢野) はい。やっとわかりました。

(嶋田) それから第2問。はい。第2問は、通訳案内士のほうで、その地域版ということで、地域通訳案内士に関してご質問が出ました。

(笠井) 研修というのは、自治体、都道府県ですとか市町村が、この計画を作りまして、その計画に基づいて研修を行うことになりますので、この研修の内容、プログラムというのは、あくまでもその自治体、都道府県のほうで考えていただいて研修を実施していただくということになります。

講師につきましても、国からの何か派遣というわけではなくて、その地域の中で実施していただくことになりますので、その地域の中で取り組むという仕組みになっています。

(嶋田) ありがとうございます。野田さん、よろしいですか。

(野田) はい、ありがとうございます。

(嶋田) それでは、観光庁さんのご発表に関する質問は以上で終わりました、では、平野さん、再度お立ちください。さっきのビデオ制作に関して。

(平野) はい。先ほどのビデオ動画の質問について、お答えをさせていただきます。

今まで私たちが作っていたのは、こういう観光パンフレットだったんです。皆さん袋の中に入っているんですね。こういうのを5,000部作ったり、3,000部作ったりして、いろいろな所に紹介をしてたんですけど、これがなかなか皆さんの所に行き渡ってないんですね。いくらこれを刷って配っても、よそから来た人はほとんど見られていないということが分かってですね。これ、費用も結構かかるんです。印刷費用がですね。50万、60万とかかかるんです。

それで、もっと多くの人に見てもらいたいということで考えたのが、先ほどのまち歩き動画です。あれを撮影した人は、先ほど質問にありましたように、業者の人じゃないです。本当にビデオ同好会の方をお願いをしています。ビデオを自分たちで撮影して、編集して、そしてアップするという、ビデオボランティアという愛好会、20人ぐらいの団体がいます。そういう人を私らが見つけてきて、なんとか撮影してもらえないだろうか。

費用はどれぐらいかかったかといいますと、1本、先ほどの5分のを1本撮影して、編集して、アップするまでの費用は3万円で。3万円でできてます。だから、その費用を、毎年2本ずつアップしていったんですけど、その分、このパンフレットをちょっと枚数を減らしていいですから、そっちアップしてくださいということをお願いして、もう、今これをどんどんアップしてってます。

こういうのが広がっていくと、もういろいろ、今、問い合わせがたくさん来てて、これをガイドさんのところを英語とかで表示してほしいということですね。でも、これ英語でできるんですよ、すぐ。このガイドさんがしゃべってる下に、英字を入れてですね、案内できると。だから、すごい発展形が出てくるし、この映像があるということが分かったら、例えばきょう来られている北海道の人だって、もうすぐ見ることができるわけですね。

だから、来る前にそういうのをチェックしてもらって、これに参加しようかという選択が非常に分かりやすくできるということなんでね。こういうのに今から積極的に取り組んでいきたいなというふうに思っています。

以上です。

(嶋田) はい。

(田鍋) プレビューとって、何件見られているとか、お客さまというか。

(平野) はい。この前、これがアップしていただいたのが、もう割とつい最近なんです。つい最近ですね。だけど、もういろいろ反響がたくさん所から来てます。

それぞれの各市町村がものすごくリンクを貼ってくれてですね、これを宣伝してくれていますので、非常にこれから多くの人が見られるというふうに思っています。

(嶋田) さすがに行政との協働ということですね。

(平野) そうということです。

(嶋田) ボランティアガイドの側では、どういう組織をおつくりになったんですか。このビデオ制作のために。

(平野) 一応ボランティアガイドのほうでは、各団体、地区ごとの団体で、どういうのを撮影していこうかというのを、それぞれ地区ごとに相談して。

(嶋田) もう地区ごとのビデオだから、その地区でまたその組織をつくってということですね。

(平野) そうです、そうですね。

(嶋田) 何人ぐらいご参加になりました。ガイドをしている方はお一人だったけれど。

(平野) だけど、その周りには、ちょっと何人かこういてですね、そして、ただ風景を映すだけじゃなくて、そこに特産品の食べ物を、ちょっとご飯を映したりとか、お土産品もせっかくやから映そうとか、そういうお店にも立ち寄る。

(嶋田) つまりシナリオを作る側に何人かが参加し。

(平野) そうですね。

(嶋田) それから、映像を映される側にも参加し。

(平野) で、町の人にも協力してもらって。

(嶋田) 町の方にもお願い。

(平野) も、協力してもらってですね。

(嶋田) はい。

(平野) それが、いとも簡単にできるということが分かってですね。これを本当の映像業者に頼むと、すごいお金がかかるんです。

(嶋田) そうですね。

(平野) すごいお金がかかる。それで、こんだけ高いクオリティーのものができるといふのをね。

(嶋田) 田鍋さん、明日にでも、もうこうしたいような顔をしてらっしゃいます。

(田鍋) 今、おっしゃったように、 - - -。

(嶋田) ごめんなさい、今、マイクあげますので。

(田鍋) 外国の方も共通して見られるというところで。やっぱり訴求効果ですかね、そういうの大きいと思いますので、私どももちょっとできればいいなと思うんですけども。ただ、観光協会なので、やる場合に、じゃあ誰が見るのとか、何件、どれぐらい人が見るのかとか、根拠要素が要るので、どんなものかなと思ひまして、ちょっとお伺いしました。

(嶋田) でも、有望なあれですよ。はい。それでは、ご質問タイムと、そのお答えの

ほうは、ひとまず置きまして、きょうのご発表の中でご意見、あるいはこうしたらいい、その中でまたご質問も入ってくるかもしれませんが、フリーで皆様からのご意見いただきたいと思います。

はい、どうぞ。

(矢野) 今のいろいろなお話の中で、地域通訳案内士制度の制度の中で、戦略的にこれから進めるっていう形になった場合に、通訳機器、機械ですね、先ほどあったタブレットなんていうような話もありましたし、今の大分の会長さんが言われた、英語ですぐ出せるんだってというような、そういう機器がものすごく日進月歩してるわけですね。それらを活用することが、より現実的な問題として活用できる、本当にいいときになってきたのかなと。

で、その辺が、この案内士制度の中で、これから現実的に動けるような、そういうふうなバックアップとか、あるいは制度的にそれを活用、事業の中に入れていこうやっっていこうというようなものが、この制度の中に考えているのか、その辺がこれからのことがあると思いますので、その辺を教えていただければありがたいと思います。

(嶋田) これは質問のお相手はここでしょうか、後ろでしょうか。

(矢野) 質問は、後ろも前も両方。

(嶋田) 両方。

(矢野) はい。

(嶋田) はい。それでは、まず、このフロアーの平場のほうで行きましょう。平場のほうで、今のことに関してご意見。

(村井) いいですか。

(嶋田) はい、どうぞ。

(村井) 今おっしゃったような、例えば私が申しますと、タブレットの問題です。

(嶋田) ちょっと待ってくださいね。

(村井) これ、実は本当は、さらに外国からの直行便が来て、インバウンドが増えて、われわれがやっぱり対応しきれないんですけどね。

佐賀県にはコールセンターがあって、24時間対応で、外国の方の質問をおいて、そこを通訳してくれるっていう設備もあるんですけど、これね、まどろっこしくてね、時間ばかりたつんで、それをもっと直裁的に何かできないかっていうことでね、実は私どもは「えびすで町づくりネットワーク」という、町づくりの団体ですけれども、運営費用は佐賀市の予算で頂戴している。

で、後から言いたいと思ったの、人件費は出ませんけれど、運営費は出るんで。

(嶋田) つまり組織は。

(村井) その中から。

(嶋田) 組織は佐賀県のお金でやってらっしゃるという形で。

(村井) そうそうそう。

(嶋田) はい、ごめんなさい、どうぞ。

(村井) それで、その予算の中からですね、テスト的に実は今年初めてタブレットを採用してみたんです。非常に好評でね、スムーズに、先ほど言いましたが会話が進むと。結局団体で来る客よりも、個人で来る客が最近インバウンド増えてきたと思うんですね。女の子2人とか、家族連れとか。そうすると、いちいち通訳を来てくれとかいう話にもならないので、タブレットで置けば非常によろしい。

今、タブレットは非常に安く手に入ります。極端に言うと全世界の言語がこれで使えるわけですから、これはぜひお薦めのアイテムだというふうに思っています。少しずつ台数も増やしていきたい。今はステーションという基地でそれを使ってるんですけども、できたらわれわれがガイドするときにそれを持って歩いてですね、それで説明をしていきたいなというふうに考えているんです。

予算はそういう形で公費を使わせていただいております。

(嶋田) はい。

(野田) 今のタブレットの件でよろしいですか。

(嶋田) はい、それでは。

(野田) 熊本県ではですね、実は熊本、きょう見えてないのかな、観光連盟が主催で昨年度外国人対応ということで研修があつて。そして、そのタブレットをそこに参加した団体1台ずつくれました。これは県の費用だと思うんですが、観光連盟さん、きょう見えてないのかな。熊本県の観光連盟さんが主催でされまして、とてもいい、私たちもそれ、とても。私たちは実際に生身で英語でガイドする団体ですけども、でもやはり中国語とか、韓国語とか、台湾語とか、細かくありまして、とても有効でした。

(嶋田) はい。というようなことで、何となく情報が出そろったところでございますが、国としての考えをお伺いしたいと思います。

(笠井) はい。先ほどご質問がございましたが、その地域通訳案内士制度の中で、そういった翻訳の機器を使うとか、そのタブレットの機器を使うというのは、必ずしも前提にしているものではございません。あくまでもガイドの方が外国語で話すという資格を付与するという制度になりますので、その機器を使うこと自体は特に何か制約があるわけではないので、それは各地域の考えの中でおまとめいただくのかなと思います。

ただ、やっぱり先ほど1つ目の中で説明したとおり、ガイドというのが都市部に偏在しているという状況でございますので、今後そのいろんな地域に、例えば英語だけでなく東南アジアとか、いろんな国々から来ると、そういったところで、なかなかその多言語対応というのがなかなか難しいという状況は、多分各地の皆さんの状況も多分同じだと思いますので、そういったその機器というもの、タブレットというものを有効に活用しながら各地の訪日外国人に対するガイドというものを盛り上げていただければなというふうに考えております。

(嶋田) どうもありがとうございました。それでは、ちょっと問題を広げてまいりまし

よう。訪日外国人の方々に対して、先ほどちょっと、どこで出会うのとか、そんなご質問、ちょっとちらっとありましたけれども。広い意味でこれから皆さんの地域で展開していくときの、いや、困ってるんだよなんてことがございましたら、ちょっとご発表をいただきたいと思います。いかがですか。

(野田) またいいですか、大変困ってます。

(嶋田) 大変困ってる、それはよく分かります。

(野田) 地震の後で。

(嶋田) そうね、ちょっと待ってね。他の方、野田さんの声に負けちゃうから。はい、他の方、いかがですか。どうですか。はい、よろしくお願いします。

(斉藤) すいません。先ほどの地方版の通訳案内士の件なんですけど、すいません、何回もしつこく。

何となく、こうイメージが湧かないというかですね。資格なくともお金もらえると、の中で、この地域版ができた。で、これはどういう、これを案内士になってメリットというのは何かあるのかというふうなことが素朴にですね。

それで、これを名刺代わりにしてお客さんを呼び込むっていう意味があるのか、ちょっとその辺のところがよく分からないんで教えてもらえませんか。

(嶋田) はい。それではお答えいただけますか。今、マイクを。

(笠井) 先ほどお話がありましたように、確かに業務独占廃止によって、今後は無資格者の方でも有償で通訳ガイドを行うことができるという形になります。しかしながら、とはいってもホテルですとか、旅行会社のほうから、引き続き例えば質の高い通訳案内士を求める声っていうのは、やっぱりそれほど、結構ございまして、そういった方に付いては、引き続き有資格者というのを活用していただけるために、資格を持つ必要は、メリットはあるのかなというふうに考えております。

なので、無資格者の方に依頼する方もいれば、有資格者、やっぱり質の高いガイドを受けたいとか、やっぱり専門性の高いガイドを受けたいとか、そういったニーズはこれからも引き続きあると思いますので、そういった方には有資格者のという形で資格を持っている方が活躍できる場が今後とも残されているのかなというふうに考えています。

(嶋田) ありがとうございます。通訳案内士と、あるいは国の先ほどのDMO、この辺でちょっとまだ、ちょっと何となくすっきりしないんだよっていう方、おいでになりますか。よろしいですか。はい。では。

(田鍋) その通訳案内士でメリットがあると、ホテルや旅行者から要望が多いとあったんですけど、これは営業としては個人。ホテルさんから依頼があつて、対個人にするのかとか、会社設立して、その対価とか、その辺りってどうされるのか。個人営業でもいいのかとか、その辺り。

あと、都市部というか、東京とか大阪、ゴールデンルートとか、多分こういう要望が多いと思うんですけども、私ども四国、徳島、まずそういうのが少ないので、これにも実

際地図上で、残念ながら四国が入ってないのが非常に残念なんです。

そういう地域特性というんですかね、そういう、やっぱり弱い所に対してちょっとメリットがあったらお教えいただきたいなと思います。

(嶋田) はい。それでは、再度どうぞよろしく。

(笠井) すいません、1点目については、通訳案内士の方が仕事を受けるに当たってってことですか。

(田鍋) どういうふうに自分で食べていけるか。

(笠井) 今もそうなんです、基本的にはその個人でやっていただく方が結構多いんですが、とはいえ通訳案内士の団体とかですね、旅行業者のほうに所属して仕事を得ている方が結構多いという状況でございます。

(嶋田) それと、あと四国に。

(笠井) この地図で入れてるのは、その特例法に基づいて導入している地域でございますので、今後徳島のほうでも導入。

(田鍋) いや、別にそういうわけではないのですが、言い方の問題で、きついとおもわれているかもしれません。

(笠井) 今後ですね、地域のほうでもやっぱりリピーターを中心として、やっぱり各地に訪れたいという方で、やっぱりニーズというのは増えてくると思いますので、そういった地域、ニーズを捉えまして、そういったガイドを創設していくというのは大いに考えられるのかなというふうには思っております。

(田鍋) ぜひよろしくお願いします。

(嶋田) よろしいですか。

(笠井) はい。

(嶋田) よろしいですか。はい、それでは、お待たせしました。

(野田) これは質問とかではなくて要望なんですけど、せっかく観光庁の方が見えているので、例えば2016年の熊本大地震後、もう本当に海外からの観光はぱったりとなくなるというか、減ってます。もちろん八代港が再開、再び開かれたので、韓国、中国、台湾とかのアジアのほうからの大型観光客、大型団体客は戻って、やっと戻ってきましたけれども、欧米からは、もうぱったりです。

もちろん東京とか大都市は、きょう来るときもたくさん外国人はやっぱり来てるんだなと思いましたが、熊本はやはり KUMAMOTO と、もう英語で言ったら、ぱっと、Earthquake ってなるぐらい、世界中に発信されたんですね、あのとき。で、水俣、熊本、水俣は Minamata disease で、熊本はもう地震でというふうには、そういうイメージがやっぱりなかなか払拭できていない。

ですから、日本として、観光庁として、熊本の、熊本っていうか、熊本とは限りません。これから、この間も災害で自然災害で非常なダメージを受けた町等の、これからの観光を通しての町づくりというより、私たちは観光を通しての再建ですね。町の再建、市の

再建、県の再建、特にツーリズムの再建に本当に本格的に取り組んでいかないと、もうとてもまだまだ観光復興したとは言えないので、観光庁が率先して世界に発信してほしいと思うんですね。いろんな自然災害で被災した町や村も大丈夫なんだということをですね。

それ以前には、もちろん本格的な再建、例えば道路の整備だとかが大事になってきて、国土交通省と連携しての復興を急いでいただきたいですけど、ここで発信ということも大事なので、ぜひそれは何らかの形でやってほしいと思います。これは要望です。

(石川) 東北も同じです。

(野田) そうです、そうです。東北も、東北の石巻、それから、そうですね。

(石川) はい。

(野田) もう本当に、みんな戻ってきてません。私たちは世界中から一斉にキャンセルが来ました。地震の後ですね。ですから、これだけはきょうはどうしても言いたくて出てきました。よろしくお願いします。

(嶋田) なるほど、かしこまりました。 はい、それでは次の方。

(中谷) 青森県の中谷です。行政のほうでは、いろいろ観光の係の方でも、いろいろ政策は出してくれる。アイデアは出す。けども地域差というものは非常に日本が多いんです。大きいんです。で、それは地域差とか、あるいは各市町村にお任せですとなると、万歳してしまう。

どうも日本のこのやってることは、行政というのは、そういうふうには案は出す、大変いいんですよ、案を出して、そのおかげで皆さんは月給もらってますから。じゃあ、私たちは本当にボランティアなんですわな。いわゆる余暇の善用と、これ、ボランティアガイドができたときには、余暇の善用ということで始めたはずなんです。それがずっと尾を引いてます。それをやって飯の食いだねにしてる人は誰もいないはずなんです。

けども、案はくれる。どうそれを私たちは受け止めて、どこまでやれるのかということ、いろいろこの仲間で討議して考えてるうちに、この何年かたって、新しいのまた、バーンと来る。ですから、咀嚼しないうちに、また出てくると。これ、どうもおかしいんじゃないかなというふうなこと。

例えば通訳のそのことでも、今出ました通訳士、じゃあ、それと私たちのボランティアガイドのその活動と、どういう関わり、具体的にあるのかと。そんなことをこう言わないで、ぽーんと別な話になってしまう。それに惑わされるんですわな。

で、私は青森県の弘前市の出身ですけど、その通訳のそれ、あれで弘前大学の留学生をお願いして、さくらまつりのときだけ、土日祭日テントに来てもらってやってるんです。それは弘前大学の教授の計らいで、やっぱりそちらさんと同じように、単位になっていくんです。ですから、大変一生懸命やってくれる。

それから、弘前の場合は今年同時通訳の免許を持つてる人がボランティアガイドの会員になってくれた。本当に良かったです。ただ、笑い話になりますが、大学生が来て、留学生が来て、私たちしゃべるのを通訳やってくれるんですが、津軽弁を翻訳するのが大変難

しくて。私たちも一生懸命日本語しゃべってるんだけど、留学生にとっては外国語に聞こえてる。そういう笑い話もあります。すいません、以上です。

(嶋田) はい。中谷さん、最後は笑わせていただきました。はい。それでは問題に戻りましょう。

今回ここで、第2部で検討いたしますのは、ボランティアガイドと行政の関係についてということで、こちらのほうにお時間頂戴したいと思います。

それでは、それぞれの所でお考えのこと、はい。お隣で。マイクを持ってらっしゃる。はい。よろしくお願いします。

(小原) マイクが横から来ましたので。

(嶋田) 岩手県の小原さんですね。

(小原) 岩手県の小原でございます。

お隣の引き続き、私も同じ思いです。今までのお話は、ほとんど自分の目の周りよりも少し高い位置での質疑応答だったような気がいたします。だからと言って関係ないわということではなくて、やはりそこから自分たちの町でも使えるようなものを、やはりせっかくここへ来て学んだんですから、少しは持って帰りたいと思っております。

で、まず、この通訳とか、その英語のことはまずここまでとして、私たち今現状ですね、この行政との関わりですが、先ほど観光庁の方がエコツーリズムの話とか、酒蔵、その他の話を面として考えて、観光ストーリーにしていくというようなことをおっしゃいましたが、やはり私たちも今整理してみると、そういうことを実際やっているんですね。

で、エコツーリズムは市の地域振興課、観光課等でやっていますし、酒蔵、実は私たちの町には南部美人という蔵元がありまして、今月の初めですか、世界のお酒の大会で1位取りました。ですから、結構世界には乗り出しているんです。酒も漆もそうです。浄法寺漆というのがありまして、これは日本一の漆。そして中国等の漆がどんどん入ってきてますが、この品質の良さで日本の、それこそ大事な遺産的なものは、全部この浄法寺漆を使って修復してるんだと思います。

そういう意味で、結構発信しているんですが、受け取る側、意外とこの東北っていうのは、東北全体を言うわけではありませんが、青森、岩手等は特にそうなんですが、実は言葉でもみんなコンプレックスを持って生きてきたんですね。それこそ津軽弁は英語より分かりません。隣の私でさえ分かりません。そういう難しい言語を持っている青森、岩手等は、いろんな意味で後れをとっております。

しかし、やはり産業の面で必死に発信してはいるんです。お客さまも全国からの、私は二戸市という県北のほうの城跡のガイドをしておりますが、日本全国からお客さまはいらっしやいます。北海道から九州までです。それは前からそうではあるんですけども、今年特に国の城郭協会より続日本100名城、100名城で落とされてしまったが同格の資質を持っているということで選定されました。そういうこともありまして、マニアの方たちがやはり結構押し掛けてまいります。なかなか、残念ながら、残念ながらっていうか、幸運な

ことについて言ったらいいのか、外国人はあまりお見えになりません。やはり国内のお客さま向けの観光地だと思っております。

ガイドハウスっていうものを持っておりますが、ここ、結構冷暖房完備したガイドハウスです。で、管理は市のほうで、埋蔵文化財センターのほうでやっておりますが、運営はガイドのほうで全部やっております。そういう意味で協力体制を持ってやっております。

私たち全てボランティアガイドと言いましても、やはり諸費用がかかりますので、市のほうから40万円の補助金をいただいて、これを運営しております。

以上、そんなような感じの日々でございます。

(嶋田) 施設、それから運営、そうした面で行政と協働してらっしゃるとお聞きができて。

(小原) そうですね、いい関係でやっております。

(嶋田) はい。他にいかがですか。こんな例もあるよということで。はい。そちらと、それから今手を挙げた方、よろしいですか。はい、じゃあ1、2で。ごめんなさい、あちらが先だったんで。はい。

(城戸) こんな例で手を挙げたんじゃないんですけど、よろしいですかね。

(嶋田) 鹿児島市のほうからこちらへ。

(城戸) 行政との関わりということで。

(嶋田) やっぱり東北が出たら鹿児島ということで。

(城戸) というわけじゃないんですけども。このガイド団体というのが、いろんな組織がありますね。だから、その行政に要求を出すといいますか、その内容もかなり違うような、私はこの会議に出て、去年も参加させていただきましたが、そういうことも考えております。

というのが、同じ鹿児島でも、組織が自主的につくって市町村が援助といいますか、サポートしてやるというようなところ。それから、例えば私は鹿児島市ですが、鹿児島市のその、これはもうNPO法人もいろいろありますけれども、一番大きいのは鹿児島市の外郭団体のつくっている団体に所属しておる、そこが募集をして、要請して、今10年になります。そうやってから。私は最初からたまたまおるんですけども。

いつも感じておるのは、先ほどDMOでしたかね、こういう広い意味のこの連携といいますか、こういうのを提起しましたけれども、非常に参考になりました。ただ、そのつくっている所、主導をしている所の組織においては、なかなかガイドのいろいろなこの意見といいますか、またこのボランティアでやっております。だけれども、なかなかそれを行政のほうで聞くのが非常にややこしいということを常々思っているんですけども。

国のほうで、またそういうことについては、そのDMOも含めて積極的にアピールというか、主導というのはちょっと言い過ぎだと思いますので、アピールしていただければなと。それが日本国あるいはいろんな地域の観光のそういうのにもなるのかなというふうに思っています。

ちょっとはっきり言わない部分もありましたけど。

(嶋田) いえ、だいぶおっしゃってますけれども。おっしゃらない部分もございますよね。はい。せつかく国の方がいらっしゃるんで、思わず口をついてと思います。

はい、それでは岐阜の藤井さん。

(藤井) はい。岐阜県でございます。先ほど大分のほうで、県内 52 団体が、54 団体まで加入されたというお話を聞いておるので、今、この表を見せていただいたんですけども。実はわれわれ岐阜県は、現在ちょっとお恥ずかしい話ですけど、県内大体 40 団体あるんです。そのうち、きょう皆さんに資料をお渡しさせていただいているのが、13 団体の加入です。ですから、約 3 分の 1 です。

ここで、先ほど通訳案内士のお話が出まして、高山市とか飛騨地域、ここは飛騨古川は入っておられますけども、残念ながら高山市なんか、会員じゃないんです。

それで、実は私が聞きたいことはですね、お恥ずかしい話が 13 団体で実は今年度から、実は私会長になったんですけども、一つが一番大きなテーマはですね、県内の方に、先ほどお聞きした市町村の DMO になるかもしれませんけども、要は団体の会員を増やしたいということで、今一つ各務原市が一つ入りたいなっていう話あるんですけども。どのように PR する、されるんか。例えば行政からお願いするんだとか、これ、正直言って、きょう出席されてる方にいろいろお聞きしたいんですけども、あれもこれも聞いたら大変なものですから、ちょっとその辺のテクニックっちゅうんですかね、それを教えていただければ幸いかと思っております。

(嶋田) はい。それでは、組織づくりに関して、行政が絡むかもねとおっしゃりながら、ご質問を皆さんに出しております。組織づくりでうまくやってるよというところ、お手を挙げてお話を聞かせてください。いかがですか。なんか、この辺全然お声が聞こえないんですが。組織づくりに関して、はい、それでは広島。

(小林) 広島の小林です。一応県で全体では総会、年に 1 回観光ボランティアガイドの総会をやっております。そこでオブザーブとして各市町の観光課も出席される所もございます。ガイドの会議がある所に、行政からと、それからボランティアの私のほうが働き掛けをして加入をしております。

現在 40 数団体で広島県では 600、700 名が加入しております。加入してない所もありますが、そういった所にいろいろお聞きしますと、メリットがないと。まあ、メリットない所は、もう加入していただかなくてもよろしいと、こういうようなお話をしております。いろいろ、市町の観光課、観光連盟、そしてボランティアで全体で加入を組織しております。ということです。

(嶋田) それぞれの各諸団体のご意向もあるんでしょうね。でも、メリットがないと言われると、ぞっとしますね。

(嶋田) ごめんね、あなた誰だったか。はい。

(田中) 福井県から来ました、福井県観光ボランティアガイド連絡協議会の事務局をし

ております。福井県の場合は観光ボランティアガイド、グループ全員が加入しています。

メリットしかないんですね。県からの補助金が120何万で、観光連盟からも30万ぐらいあって、会費はもらっていないという、それでも何をしているかっていうと、先進地視察研修会とか、広域的にもっとガイドをしようって言ってバスで回って県内を回ってガイドの研修会をしようとか、いろんな県内の観光ボランティアガイドがどうやったら良くなっていくか、育成されていくかっていうのを、福井県さんがすごい大事にしてくれていて、予算が付いているので、入らないことはないっていう感じが。

(嶋田) メリットがあるっていうことですね。

(田中) そうですね。逆に聞きたいのが、どうして加入が少ないのかというのを。会費を取っているとか、そういうことがあるのかどうかを聞きたい。

(藤井) 先ほど広島の方が言われましたね。総会年1回、それから研修会を秋に1回やっております。今言う、賛助会員でですね、行政の方と、それから観光協会の方も入っていただいております。で、要は入っていただいておりますけど、正直言いますと県の補助金なんか一切ございません。われわれは会員費を払い、それから賛助会員に会費をいただき、で、運営しております。

正直言ってあんまり金額多くないです。どちらかいうと、私多治見の観光ガイドでございますけど、どちらかといえば私の多治見のほうがお金が多いです。正直言ってね、私よく分からない。今言われましたようにね、県の補助金が出る、100何万って言われて、早速われわれ県の方をお呼びするんですけど、先ほど言いましたように行政の方っていったのが、どうも岐阜県の県の方が、あんまりその気がないんじゃないか。秋来ていただくもので、大いにその前に、先に、そういうことをPRしようかなと思って。ありがとうございます。

(嶋田) はい。それぞれの都道府県のご事情もあろうかと思えますから、どうぞおっしゃるときには、各都道府県の事例のデータをお見せになると有効かもしれませんね。

はい、お待たせしました。どうぞ。

(野田) 英語の資格うんぬんは別としてですね、英語ができるガイドさんを自分たちの団体の中で育てたり、あるいは勧誘し、勧誘って言うと変ですけど、メンバーになるように、なってもらおうと団体自体が若返ります。というのは、これから特にそうですけど、若者たちがやっぱり英語を活用したい。でも、なかなか地方においては、その英語を使うチャンスがない。こういうガイド団体では外国人と直接触れて、直接英語をプラクティス、練習もできるのよというようなことで、私たちのガイド団体はどんどん若返っていつてます。

それと、もう一つのメリットは働くママの産休後の職場復帰です。職場って言うと、ちょっと私たちがまるでプロの集団みたいですけども、職場復帰的な感覚で働くママたちが入ってくれて、しかも女性はもう本当力強くてですね、シニアのリタイアの男性たちよりは、どんどん引っ張っていつてくれてですね、そういう意味で英語を使うことは、いろ

んなメリットが、お金とかではないんですけど、団体全体として、それから将来のビジョンとしては、とても各団体に有効じゃないんでしょうか。

それから、これはもう一つ、次世代観光人材育成にもつながると思っています。

(嶋田) はい、ありがとうございます。それでは問題を、ボランティアガイドと行政との役割についてというところでご発言をいただきたいと思います。はい。鈴木さん、どうぞ。

(鈴木) 愛知の鈴木と申します。2つ目のテーマが地域づくりにおける観光ボランティアガイドと行政の関係ということでテーマをいただいておりますので、その件について一言発言させていただきます。

近年、観光町づくりと言われて、観光が地域活性化や地域づくりの重要な柱となり、その中心的な役割を住民活動が担っている場合が各地とも多く見られると思います。特に私たち観光ボランティアガイドは郷土愛と自己実現を基に自発的に活動をしている、住民による大変貴重な住民による観光サポーターであり、県レベル団体である愛知観光ボランティアガイドの会も含め、地元、来訪者、観光客を結ぶ架け橋となっております。

特に愛知県におきましては、2016年から2020年までの5カ年計画で、現在愛知観光戦略が展開されているところでございまして、観光ボランティアガイド等を通じた活動は観光、人づくりの一環として、プロジェクトチームとしての大変重要な位置付けを占めております。

先ほど郷土愛と申し上げましたが、私ども愛知の会の加盟団体の多くは、ふるさとを知ること、ふるさとを愛する心を育てる、これをモットーに地元の学校や自治体、行政機関や、観光協会と協力して、地域を知る講座や見学会を行っておりますことを付け加えさせていただきます。以上です。

(嶋田) はい、いろいろご準備していただいて、ありがとうございます。じっくりとボランティアガイドの原点に戻った気がいたします。

はい、それでは、その原点に立って行政との関係でなかなかご意見がまだまだおあり何ではないでしょうか。はい、お願いします。こちらから。

(吉村) もう時間がだんだん迫ってくるので気になるんですけども。三重県です。三重県の吉村といいます。資料が入ってるんですけども、これは三重県というよりも、津市の、私の在住しておる津市の資料をちょっと入れさせていただきました。

私は県の、三重県で44団体で1,100名の会員がいるんですけども。なかなか三重県、今、大変ピンチでしてですね。予算的に。それっていうのは、一つはサミットの悪影響だろうと思うんですけども。サミットのときに、前にですね、観光客は特に外人がぐっと増えたっていうのは全国でも2位とかっていうのは、その記録になったようなんですけど、その次のときには今度は減って、全国の下位のほうに入っていたというような、そういう状況があるわけです。

ところが、県の対応がですね、私たちの、この間も観光局長と私、直談判に行ったんで

すけれども、うちの総会をしまして、そのときに観光局長があいさつに来てくれる予定でしたもんですから、その前にちょっと手を打っとけと思って、話をしたわけです。ところが、なかなか予算がですね、県の方には、ちょっと申し訳ないんですけれども、そういったことで財政的なピンチというところから、実は今までは県の委託を受けて観光協会が事業をしております。その中の予算の中から私たちの三重県おもてなし三重観光ボランティアガイド連絡協議会のほうに委託金をもらっておったわけです。これは大体知れてるんですけども、60万円ぐらいの予算だったんです。

ところが昨年度、この28年度は、それがゼロになりました。もう全く、私はもうサミットの悪影響だなというふうに。そして、今現在はどうかといいますと、そのサミットに外人がたくさんやってきた、また今もそういう客が続いているというのが、それに関連した一部の観光地なんですね。伊勢市、それから鳥羽の観光地、それから南へ行って熊野古道ですね。こういった所に客がごろっと回っていく。ところが、その他の所に至っては非常に観光客が少ない。で、県の観光局長にも、こういうこともそれは県としては大事だけれども、もっと地域に目を向けた行政を行っていただかないとですね、地域を観光として活性化できないんじゃないかという話をしてきたわけですけれども。そういった面で県の対応というのが大変偏っているなというような点があります。

私たちは、一つは今まで県が4年、5年でそういった観光についての事業を組むわけですね。ところが、県のこの事業っていうのは5年とか4年単位の事業で、それが済むと、もうころっと忘れてしまうんですね。そういうものは、やっぱり前にやったことをどのように今度は発展していくかというふうに、先のことを見通した行政をせないかんということをいつも言っておるんですけれども、なかなか。それでなっていたところはよろしいですね。

ところが、ボランティアガイドのようにお金にならない仕事っていうのは、あと発展していくってことはなかなか考えられないです。ここまでやったからあとは自分たちでやっていけよっていうのでは、大変困るわけですね。県がボランティアガイドを増やそうと、そういうふうにして10何年か前に立ち上がった。ところが、それを最後まで面倒見ないというような、そういう行政が現在やないかと思うんですね。

そういうことがいつも行政に働き掛けているんですけれども、なかなか行政というのはそういった方向を理解してくれないというのが一つです。

それから、そういうのがずっと続いてきてですね、そして県の予算が切られて、そのときにあった、また別の団体があったんですけれども、それが切られてしまいましたもんですから、そこで、この現在ある協議会ができてきたわけです。

そういったことが市町村についても同じようなことが言えるわけです。私は津市なんですけれども、津市でまた個人的な、個人的というか小さな個々のガイドの会は幾つかあったわけですけれども、全体の津市としてのまとまった協議会はなかったわけです。ところが県でやっておった事業が切られてしまったもんですから、今度は津市に働き掛けて、そ

して津市にあった14あったんですけど、現在13のガイド会があります。それがまとまって、観光ボランティアガイドネットワーク協議会というのをつくりました。で、会員が110名ばっかなんですけども、その中でその会が。

そうすると、これは県の関係よりも、市町村の助成のほうが大変役立っているわけです。津市は、そういった面で大変力を入れてくれているわけですけども、そこに書いてある300万あたりの予算を見てくれて、そして津市のほうの指導者のような方を事務局において、そしてわれわれの会を引っ張ってってくれているわけです。その中で、いちいち細かいことを言ってますと時間取りますので、パンフレットに挙げたようないろいろな事業を進めているというような、そういう現象でございました。

(嶋田) それぞれ難しいですね。

(藤井) それと、今度総会に出たことでね、これはちょっと議題とは違うんですけども、この印刷物が、この間県が持ってきた印刷物を見ますと、インバウンドという言葉ですね。これがここへ来て、私はちょっと気が休んだんですけども、表にインバウンドと書かないで日本語で書いてあります。これを使うんじゃないのかみたいなことを総会の中で出てきたんです。そのインバウンドを辞書で引くと、そういうような意味じゃないですね。東京の中でも内回りと外回りをインバウンドの。そういうようなことで、もうちょっと言葉をよく分かる言葉を使ったパンフレットを作ってほしいよという、そういうことが総会で出ました。以上です。

(嶋田) それぞれ県の事情、市町村の事情の中を大変ご苦労なさっている様子がよく分かりました。

お待たせいたしました。はい。

(齋藤) 熊本県の齋藤といいます。ボランティアと行政との関係ってということで、一つだけちょっと考えていることがありますけども。

私の所は世界遺産に一昨年登録をしていただきまして、明治日本の産業革命遺産、製鉄、製鋼、造船、石炭産業ということでもありますけども、行政の場合は登録取ったから終わりっていう感じでもありますけども、私は始まりという思いであります。やはりビジネスチャンスにも当然考えていかなきゃいかんだろうし、いろんな保全、補修もありますし、やはりこれからいろんな発信をしていかなきゃいけないという感じでもあります。

ただ、なかなか登録後の対応っていうのが、なかなかこう、鹿児島が幹事県でありますから、なかなか鹿児島の指示じゃないけども、総意でいろいろ方向付けをするんですけども、いまいち止まってしまっている状態であります。

それと、もう一つは市町村で見た場合に、荒尾市、大牟田市、宇城市で連携してガイドの交流をしながら、市町村の交流し、観光物産業界のお互いの連携を取ろうということでもありますけども、全部行政主導であります。やはり民間のガイドが主体で、お互いに自主的に、その交流をするようなシステムも、やはり片方には構築しなきゃいかんと思うんですけど、なかなかその辺りの対応がされてない。だから、やっぱり行政は行政、民間は民

間と、お互いに連携しながら、協力しながらやはり進めていくシステムをつくらなければ、やはり行政主導だけではなかなか難しいという感じでありまして、その辺りについて、国の立場から見て、ちょっと??タイジョコウショウ??で見てのアドバイス等がありましたらば、ぜひご指導いただければと思います。ありがとうございます。

(嶋田) 大変難しい、なんか最後になったら、質問とかクエスチョンをいただきましたけれども。今の、どうですか、お答え。何かあるよ。

(木付) 同じです。

(嶋田) 同じ。ちょっと同じでもおっしゃって。 木付さん。

(木付) 福岡県の木付と申します。

(嶋田) ごめんなさい。

(木付) 今の熊本の方が言おうとされたことは、もう本当に同感です。というのは、北九州市の私、ボランティアガイドをしてるんですけども、福岡県代表で来てますので、福岡県全体のお話をさせていただきたいんですが。

先日、神宿る、沖ノ島・宗像関連遺産が世界遺産の登録を受けました。そしておとし、今の熊本の方がおっしゃったように、明治日本の産業革命遺産と、これ、私どもは製鉄所の関連の施設、それからお隣の中間市の施設があるんですけども。それとあと2つ、福岡県には筑豊のほうで世界記憶遺産ということで、山本作兵衛さんの炭鉱画、これが登録をされているんですね。世界遺産とはちょっと趣が違いかも分かりませんが。

それから、もう1つ今年の12月にユネスコの無形文化財ということで、博多の祇園山笠、それから戸畑提灯大山笠が、やはり登録を受けて。福岡県は本当に世界遺産に関する宝をたくさん持っているんですけども。中には稼働しているいろいろ施設があって、中には入れないんですね。写真も撮ったらいけないとか、いろいろそういった制約もございます。特に沖ノ島のほう、女人禁制とかいうことで、女性全く入ることはできないんですね。

そういったさまざまな問題はございますけれども、熊本の方がおっしゃったように、やはり行政は行政、あるいは民間は民間として、それぞれ手を携えるところも必要だと思うんですよね。やっぱり行政ができること、民間ができること、ネットワークをやはりうまく利用して、点と点を面にして、ストーリー性を持って、福岡県の観光地をご紹介しながら観光案内ボランティア、語り部として頑張っていきたいと思っておりますので、さらなる国だとか、行政のお力添えをさらにお願ひしたいと思います。よろしくお願ひいたします。

(嶋田) ありがとうございます。本当に行政の役割、民間の役割、いろいろあるんですが、結構行政が強過ぎてっていうようなニュアンスのご意見が幾つか見えました。

この所で一番最後になります、私、後ろを向きまして、きょうのオブザーバーの方から、きょうの私たちの会議をご参加いただいて、一言だけ、こうやればボランティアはうまくいくよみたいなアドバイスをいただけたらと思うんですが、いかがですか。 実際に

私たちと接している行政の方々が、非常にこれだけたくさんいらっしゃるの。何かアドバイスいただけるといいななんて思うんですが。いかがでございましょう。あれ。途端に黙ってしまうとか。難しいですか。それともお持ち帰りいただいて、何かできることありますかしら。何か神奈川県で指しちゃうと、後で恨まれそうなんですけども、いけないかな。お願いします。

(大須賀) 神奈川県観光企画課の大須賀と申します。そうですね、行政という立場で、今、ボランティアガイドの方たちと接しさせていただいているんですけども。やはりそれぞれの考えがもちろんあるので、なかなかご要望にお応えできていないところはあるかとは思いますが、なるべく近付いていきたいなとは思っています。ただ、こちらとしてもやらなきゃいけないことはあるという形があるので、何か事業を始める前はですね、ちょっと今年度はいろいろご意見をいただきながら、その意見をできる限り反映した形で、ただうちとしても守らなければいけないところは守った状態で、ご一緒になるべく同じ方向を向いてやっていきたいなというふうには思っております。

今年度、今、ちょっと日本遺産の関係でお話がちょっと出てたかと思うんですけど、日本遺産、世界遺産の関係で出ていて。去年神奈川県でも幾つか日本遺産登録されて、で、やはりそこで終わりというわけでは、ちょっと今は今、もうちょっと動きたいなというふうに思っています。ここであらためて、この歴史というものが注目されたので、それをきっかけに歴史をメインとした観光について取り組んでいこうというふうに、今、今年度動いているところです。

もちろん歴史っていうと、やはり地域のこと詳しいボランティアガイドさんの協力が必要不可欠になってきておりますので、今年はより皆様のほうを向いてですね、いろいろ事業をやっていききたいなということでご協力をいただいているところでございます。

(嶋田) どうもありがとうございました。思わず拍手をしたくなりました。

実はですね、こういうような会議、ここ、ちょっと何回か私も出席させていただいたんですが、これほど行政の方が人数として、ほとんどこちらの側と同数出てらっしゃるんですよ。だんだん、本当にそういう意味ではボランティアガイドのほうを向いてくださる方たちが増えたんだなと思って、うれしく思って、第2部はこれにて終わりいたします。はい。

戻します。皆さん、ご協力ありがとうございました。

(北島) 皆さん、活発なご議論をいただきまして、どうもありがとうございました。

続きまして、最後になりましたが、閉会のご挨拶、当協会常務理事の天野のほうからさせていただきますので、よろしく申し上げます。

(天野) 長時間にわたるご議論、ありがとうございました。今、ご紹介ありがとうございました、日本観光振興協会の天野でございます。本日は本当にお暑い中、たくさんの方お集まりいただきまして、もちろん講師の方々からの話、あるいは成功事例等を踏まえた、その後のやっぱり1部、2部とも、皆様の議論がさらに熱い議論だったというふうに印象を受

けております。

地域の発展を担うという意味では、観光ボランティアガイドさんの役割ってというのは、ますますこれから大きくなっていくのではないかと思いますし、そこにはやはり熱い思いというのが必ず一人一人の方にはないと、そこに満足するお客さまを生み出すということ、それがチェーンとなって、その地域に戻ってくると、そういう流れをつくれるのは、やっぱり人の力だと思いますので、ぜひこれからも観光ボランティアガイドの活動に力を入れていただいて、地域ごとにいろいろな課題は、きょうもお聞きするとあるようでございますけれども、私ども把握しているだけでも全国に1,700の組織がございまして、4万3,000名を超える観光ボランティアガイドさんがいらっしゃいます。

やはり4万3,000人の力というのは非常に大きな力に、これからますますなっていくと思いますので、ぜひご参加の各地区のリーダーの皆様には、リーダーシップを発揮していただいて、こう熱いものを若い人、後輩たちに伝えていただくという役割を果たしていただくのと、併せまして、オブザーブでご参加の自治体の方には、きょう各地区の事例等もご参考になったかと思っておりますので、私どもがとやかく言う立場ではございませんけれども、前列の方々の思いも十分に伝わったと思っておりますので、その辺も踏まえた上で、今後地域として民と官が一体となってどう取り組んでいくかということも、逆に一緒になってお考えいただきたいなと思っております。

きょうは本当、ありがとうございます。皆様のますますのご活躍をお祈り申し上げて、私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

(北島) 天野常務、大変ありがとうございました。皆様、大変長い時間、どうもありがとうございました。本日の会議は参考になりましたでしょうか。

最後に、観光ボランティアガイド団体調査の件ですが、隔年にて行わせていただいておりますので、全国1,700団体の方からご協力をいただいております。今年度は調査の年になりますので、皆様ご協力のほど、よろしく願いいたします。後日アンケート用紙をお送りしますので、よろしく願いいたします。

なお、観光ボランティアガイドの方の交通費の件ですが、8月の末に振り込ませていただきますので、よろしく願いいたします。

続きまして、この後ですが、情報交換会がございまして参加される方につきましては、13階のほうの会場へご移動をお願いいたします。重ねまして、本日は大変ありがとうございました。

〔了〕